組版について、ふだん考えていること

（編集者を志望する文学部生用の資料から
主に組版に関する部分を抜粋）

「著者・作品への敬意」を忘れない

編集者は著者と読者の架け橋。著者の伝えたいことを読者に正確に伝える役割。交差点で旗を振っている交通整理のお巡りさんみたいなもの。

　なにをするにせよ、「著者・作品への敬意」を忘れないこと。著者がいなければ何も生まれないし、作品がなければ本はつくれない。敬意さえ忘れなければ、少々面倒な要求（大幅な加筆訂正のお願いなど）をしても受け入れてもらえる。

　そしてもう一つ、「読者への心配り」を忘れないこと。せっかく本をつくっても、読んでくれた人に伝わらないと意味がない。

著者の原稿を尊重したレイアウト

レイアウト、文章の見映えに関して、著者が関わることのできる部分は、約物（句読点やカッコなど）と改行の位置、字下げぐらいしかない。これらに込められた著者の意図を最大限尊重する。

読みやすい組版について

読みやすさの感覚は、とても保守的で慣習に大きく影響される。なので、見慣れない組版に出会うと内容に集中できない。私が読みやすいと感じるものと、みなさんが読みやすいと感じるものが違う可能性も十分あるのだが、そこはひとまず置いておく。（あえて異化効果をねらうことも。例は森博嗣『実験的経験』とか？）

基準となる組版をイメージする

まず、理想の組版、基準となる組版を想定する（「組版サンプル」参照）。

理想・基準から外れた部分には違和感を感じるもの。心がザワッとする瞬間を敏感に感じとる。普段からこの「ザワ感」を意識し、どこでどうしてザワついたのかを分析しながら読書を重ねる。極力ザワつきの少ない、さざ波のような組版を目指す。

「読者としての感覚」を大切に

このとき大切なのは、「読者としての感覚」。たくさん読書を重ねることで、「平均的な読者」の感覚を磨いておく。

詩歌などでは、改行位置などで著者があえて「ザワ感」を出すこともある。それらを敏感に感じとることが、文章を活かした編集・組版につながる。

書籍の本文について

とくに単行本の書籍の場合、見出しなどの構成要素があっちゃこっちゃ散らばっていたり、1冊の中にいろんな書体、明朝、ゴシック、ファンシー書体などを盛りこみ過ぎると、落ち着きがなく品のない本になる。いろんな情報を詰め込む雑誌と、1冊を通してテーマを掘り下げていく書籍は本来別物（最近は境界がどんどん曖昧になってきているが）。

本文・版面以外の要素

本文の版面だけではなく、マージンの取り方、柱やノンブルをどこに入れるかも重要。版面、柱、ノンブルなどを、どこに、どの大きさ（& 色と形）で置くか。

　柱やノンブルが見慣れない場所にあったり、極端に大きかったり小さかったりする場合も、気が散って本文を読むときの邪魔になる。柱やノンブルは、必要なときに初めて存在に気がつく、ぐらいがちょうどいい。

最後は見た目

要素の位置は、ある程度数値を参考にするが、最後は実際に自分の目で見た印象、感覚で決める（目の錯覚などがあるので、数値を重視しすぎたらおかしなことになる）。

道具よりも大切なこと

InDesign のような組版・レイアウトソフトはあくまで道具。「理想の組版」が見えていなければ、どんな道具を使っても、結局はソコソコどまり。

　逆に、最初からちゃんと仕上がりが見えていれば、手間ひまと制約だらけの方法・道具でも、いいものが出来上がる。

でも、一番大事なのは、組版や造本がどんなにひどかろうと、「それに負けない文章」であること。

組版の基礎の基礎

点

あ。

線

これらの見本は、活字メーカーが書体の優秀さをアピールするために作ったものだ。

文字の大きさ10ポ、字間ベタ（字送り10ポ）。
テキストの内容は、この後も含めてすべてダミー。

面

パソコンとともにワープロソフトが普及し、だれもが自分で文字を組んで文章を発表できるようになった。文章に合ったフォントをえらび、強調したい部分には「太字」を使い、ちょっと窮屈だなと思ったら、行間をあけるなり改行するなり、色々と工夫をこらす。本書は、質の高い欧文組版で知られる活版印刷会社・嘉瑞工房が、数十年にわたってコレクションしてきた金属活字書体の見本帳やパンフレットのなかから、とくに優れたもの、重要なものを約三五〇点セレクトし、解説とともに紹介したものだ。

パソコンとともにワープロソフトが普及し、だれもが自分で文字を組んで文章を発表できるようになった。文章に合ったフォントをえらび、強調したい部分には「太字」を使い、ちょっと窮屈だなと思ったら、行間をあけるなり改行するなり、色々と工夫をこらす。本書は、質の高い欧文組版で知られる活版印刷会社・嘉瑞工房が、数十年にわたってコレクションしてきた金属活字書体の見本帳やパンフレットのなかから、とくに優れたもの、重要なものを約三五〇点セレクトし、解説とともに紹介したものだ。

左右どちらも文字の大きさは10ポでベタ組み。
右は行間0ポ（行送り10ポ）、左は行間16ポ（行送り26ポ）。
この二つの間のどこかに正解があるはず？

パソコンとともにワープロソフトが普及し、だれもが自分で文字を組んで文章を発表できるようになった。文章に合ったフォントをえらび、強調したい部分には「太字」を使い、ちょっと窮屈だなと思ったら、行間をあけるなり改行するなり、色々と工夫をこらす。本書は、質の高い欧文組版で知られる活版印刷会社・嘉瑞工房が、数十年にわたってコレクションしてきた金属活字書体の見本帳やパンフレットのなかから、とくに優れたもの、重要なものを約三五〇点セレクトし、解説とともに紹介したものだ。

文字は10ポで行間8ポ。狭すぎず、広すぎず、いい感じ。
字間はすべてベタでハンパなし。最終行の文字数も行長の
半分以上あり、かつ行末にほどよいアキがあるため段落の
終わりも明確。このアキがあることで余韻も感じられる。
一つの段落としては理想的な形。こんな形を基準として意
識しながら文章を読み、組版していく。（もちろん文章の
内容、書体の種類や大きさ、行長によって基準は変わる。）

書体が与える印象の違い

パソコンとともにワープロソフトが普及し、だれもが自分で文字を組んで文章を発表できるようになった。文章に合ったフォントをえらび、強調したい部分には「太字」を使い、ちょっと窮屈だなと思ったら行間をあけるなり改行するなり、色々と工夫をこらす。

本書は、質の高い欧文組版で知られる活版印刷会社・嘉瑞工房が、数十年にわたってコレクションしてきた金属活字書体の見本帳やパンフレットのなかから、とくに優れたもの、重要なものを約三五〇点セレクトし、解説とともに紹介したものだ。

こんな、むかしは印刷会社などのプロに任せていた組版作業が、いまや会社や自宅のパソコンで手軽にできるようになった。キーボードを叩くだけで文字が勝手に並んでくれ、お利口さんのワープロソフトのおかげで、禁則処理のようなややこしい作業も自動で実現される。

これらの見本は、活字メーカーが自社の書体の優秀さをアピールするために作ったものだから、「この書体はこう使えば効果的ですよ」「ほら、こんな使い方もありなんですよ」といった具合に、各書体が最も活きる使用例がこれでもかとばかりに提示されている。

パソコンとともにワープロソフトが普及し、だれもが自分で文字を組んで文章を発表できるようになった。文章に合ったフォントをえらび、強調したい部分には「太字」を使い、ちょっと窮屈だなと思ったら行間をあけるなり改行するなり、色々と工夫をこらす。

本書は、質の高い欧文組版で知られる活版印刷会社・嘉瑞工房が、数十年にわたってコレクションしてきた金属活字書体の見本帳やパンフレットのなかから、とくに優れたもの、重要なものを約三五〇点セレクトし、解説とともに紹介したものだ。

こんな、むかしは印刷会社などのプロに任せていた組版作業が、いまや会社や自宅のパソコンで手軽にできるようになった。キーボードを叩くだけで文字が勝手に並んでくれ、お利口さんのワープロソフトのおかげで、禁則処理のようなややこしい作業も自動で実現される。

これらの見本は、活字メーカーが自社の書体の優秀さをアピールするために作ったものだから、「この書体はこう使えば効果的ですよ」「ほら、こんな使い方もありなんですよ」といった具合に、各書体が最も活きる使用例がこれでもかとばかりに提示されている。

右は筑紫オールド明朝、左は小塚明朝。左右どちらも文字サイズ10ポ・行間8ポだが、書体が変わればこんなに印象が違う。左はちょっと窮屈で版面の黒みも強く見える。

左右の黒みを揃えてみたが……

パソコンとともにワープロソフトが普及し、だれもが自分で文字を組んで文章を発表できるようになった。文章に合ったフォントをえらび、強調したい部分には「太字」を使い、ちょっと窮屈だなと思ったら行間をあけるなり改行するなり、色々と工夫をこらす。

本書は、質の高い欧文組版で知られる活版印刷会社・嘉瑞工房が、数十年にわたってコレクションしてきた金属活字書体の見本帳やパンフレットのなかから、とくに優れたもの、重要なものを約三五〇点セレクトし、解説とともに紹介したものだ。

こんな、むかしは印刷会社などのプロに任せていた組版作業が、いまや会社や自宅のパソコンで手軽にできるようになった。キーボードを叩くだけで文字が勝手に並んでくれ、お利口さんのワープロソフトのおかげで、禁則処理のようなややこしい作業も自動で実現される。

これらの見本は、活字メーカーが自社の書体の優秀さをアピールするために作ったものだから、「この書体はこう使えば効果的ですよ」「ほら、こんな使い方もありなんですよ」といった具合に、各書体が最も活きる使用例がこれでもかとばかりに提示されている。

パソコンとともにワープロソフトが普及し、だれもが自分で文字を組んで文章を発表できるようになった。文章に合ったフォントをえらび、強調したい部分には「太字」を使い、ちょっと窮屈だなと思ったら行間をあけるなり改行するなり、色々と工夫をこらす。

本書は、質の高い欧文組版で知られる活版印刷会社・嘉瑞工房が、数十年にわたってコレクションしてきた金属活字書体の見本帳やパンフレットのなかから、とくに優れたもの、重要なものを約三五〇点セレクトし、解説とともに紹介したものだ。

こんな、むかしは印刷会社などのプロに任せていた組版作業が、いまや会社や自宅のパソコンで手軽にできるようになった。キーボードを叩くだけで文字が勝手に並んでくれ、お利口さんのワープロソフトのおかげで、禁則処理のようなややこしい作業も自動で実現される。

これらの見本は、活字メーカーが自社の書体の優秀さをアピールするために作ったものだから、「この書体はこう使えば効果的ですよ」「ほら、こんな使い方もありなんですよ」といった具合に、各書体が最も活きる使用例がこれでもかとばかりに提示されている。

左ページは文字を太く、大きさを9ポに下げ（仮名は9ポの96％）、字間を約10％空けたもの。版面の黒みは右ページに近づいたが、ちょっと文字がバラついて見える。

組み方が変わった場合

プロの組版者はどんなところを見ているのか、組版の良し悪しの違いはどんな部分に現れるのか、そんな疑問に答えてくれる本書は、自分のなかに基準を作るうえで、そのコツをつかむ取っ掛かりを与えてくれる貴重な本だ。とまあ色んなことを書いてきた。

美しい書体見本を眺めているだけでも十分に楽しめる本だし、著者自身が「はじめに」で、解説にとらわれることなく「あくまで、自分の感じたことを大切に」と書いているのだから。

パソコンとともにワープロソフトが普及し、だれもが自分で文字を組んで文章を発表できるようになった。文章に合ったフォントをえらび、強調したい部分には「太字」を使い、ちょっと窮屈だなと思ったら、行間をあけるなり改行するなり、色々と工夫をこらす。本書は、質の高い欧文組版で知られる活版印刷会社・嘉瑞工房が、数十年にわたってコレクションしてきた金属活字書体の見本帳やパンフレットのなかから、とくに優れたもの、重要なものを約三五〇点セレクトし、解説とともに紹介したものだ。

これらの見本は、活字メーカーが自社の書体の優秀さをアピールするために作ったものだから、「この書体はこう使えば効果的ですよ。こんな使い方もありなんですよ」といった具合に、各書体が最も活きる使用例がこれでもかとばかりに提示されている。

こんな、昔は印刷会社などのプロに任せていた組版作業が、思いのほか自宅のパソコンでお手軽にできるようになった。キーボードを叩くだけで文字が勝手に並んでくれ、お利口さんのワープロソフトのおかげで、禁則処理のようなややこしい作業も、自動で実現される。

プロの組版者はどんなところを見ているのか、組版の良し悪しの違いはどんな部分に現れるのか、そんな疑問に答えてくれる本書は、自分のなかに基準を作るうえで、そのコツをつかむ取っ掛かりを与えてくれる貴重な本だ。とまあ色んなことを書いてきた。

美しい書体見本を眺めているだけでも十分に楽しめる本だし、著者自身が「はじめに」で、解説にとらわれることなく「あくまで、自分の感じたことを大切に」と書いているのだから。

パソコンとともにワープロソフトが普及し、だれもが自分で文字を組んで文章を発表できるようになった。文章に合ったフォントをえらび、強調したい部分には「太字」を使い、ちょっと窮屈だなと思ったら、行間をあけるなり改行するなり、色々と工夫をこらす。本書は、質の高い欧文組版で知られる活版印刷会社・嘉瑞工房が、数十年にわたってコレクションしてきた金属活字書体の見本帳やパンフレットのなかから、とくに優れたもの、重要なものを約三五〇点セレクトし、解説とともに紹介したものだ。

これらの見本は、活字メーカーが自社の書体の優秀さをアピールするために作ったものだから、「この書体はこう使えば効果的ですよ。こんな使い方もありなんですよ」といった具合に、各書体が最も活きる使用例がこれでもかとばかりに提示されている。

こんな、昔は印刷会社などのプロに任せていた組版作業が、思いのほか自宅のパソコンでお手軽にできるようになった。キーボードを叩くだけで文字が勝手に並んでくれ、お利口さんのワープロソフトのおかげで、禁則処理のようなややこしい作業も、自動で実現される。

省スペースにテキストを詰め込む新聞のように、文字が小さく一行の文字数が少ない段組の場合。今度は左の小塚明朝の方が読みやすくなる。目的にあった書体選びが大切。

見開きページのサンプル

パソコンとともにワープロソフトが普及し、だれもが自分で、文字を組んで文章を発表できるようになった。文章に合ったフォントを選び、強調したい部分には「太字」を使い、ちょっと窮屈だなと思ったら、行間をあけるなり改行するなり、色々と工夫をこらす。

こんな、昔は印刷会社などのプロに任せていた組版作業が、いまや会社や自宅のパソコンで手軽にできるようになった。キーボードを叩くだけで文字が勝手に並んでくれ、お利口さんのワープロソフトのおかげで、禁則処理のようなややこしい作業も自動で実現される。

会社の会議などで配布する資料程度ならそれでもいいとは思うが、何度も読み返してほしい書籍なんかを作るときには、やっぱり、少しでも読みやすく、美しい組版で文字を組みたい。

どれが良い組版でどれが拙い組版なのか。私自身、本を作るたびに試行錯誤を繰り返しているような状態だ。とくにチンプンカンプンなのが英語を組むとき、欧文組版の場合だ。

まず、良し悪しの判断基準が自分のなかにほとんどないので、手探りで進んでいくより仕方がない。組版ルールの本を読めば、ある程度やっちゃいけないことはわかる。でも、たんなるルール通りの組版ではなく、ちゃんと美しい組版になっているかどうかは、正直

いって自信がない。

これは私だけではなくて、英語が苦手な日本人に共通する悩みではないだろうか。

グラフィック社から刊行されている『世界の美しい欧文活字見本帳』は、そんな悩みを解決するヒント満載の一冊になっている。これは、数十年にわたって嘉瑞工房がコレクションしてきた金属活字書体の見本帳やパンフレットのなかから、とくに優れたもの、重要なものを約三五〇点セレクトし、一つずつ解説とともに紹介したものだ。

古くは一七三四年に印刷されたカスロン商会の活字見本シートをはじめ、各国で制作された様々な時代の書体見本を収録しているのだが、やはり中心は、金属活字全盛の戦後から一九七〇年代にかけてのもの、とくに読み捨てられることの多いチラシやパンフ類、大判ポスターなどは、いまでは入手も難しい貴重なものばかりだ。

これらの見本は、活字メーカーが自社の書体の優秀さをアピールするために作ったものだから、「この書体はこう使えば効果的ですよ、こんな使い方もありなんですよ」といった具合に、各書体が最も活きる使用例がこれでもかとばかりに提示されている。

とはいえ、やはり私のような者は、図版を見ただけでは「きれいだなあ」で終わってしまう。良し悪しの判断までは難しい。そこで助かるのが、掲載図版それぞれに付された解説であ

文字数・行数が増え、細かいところを見ると、かなりザワついてきている。具体的なザワつき個所とその度合いは次ページで。

こんなにシンプルな組版なのに、心がザワつく個所を書き出すと……

ザワ度
- 1ザワ（気にしない）
- 2ザワ（見て見ぬふり）
- 3ザワ（場合によっては調整する）
- 4ザワ（極力避ける）
- 5ザワ（どうにかする）

パソコンとともにワープロソフトが普及し、だれもが自分で、文字を組んで文章を発表できるようになった。文章に合ったフォントを選び、強調したい部分には「太字」を使い、ちょっと窮屈だなと思ったら、行間をあけるなり改行するなり、色々と工夫をこらす。

こんな、昔は印刷会社などのプロに任せていた組版作業が、いまや会社や自宅のパソコンで手軽にできるようになった。キーボードを叩くだけで文字が勝手に並んでくれ、お利口さんのワープロソフトのおかげで、禁則処理のようなややこしい作業も自動で実現される。

会社の会議などで配布する資料程度ならそれでもいいとは思うが、何度も読み返してほしい書籍なんかを作るときには、やっぱり、少しでも読みやすく、美しい組版で文字を組みたい。

どれが良い組版でどれが拙い組版なのか。私自身、本を作るたびに試行錯誤を繰り返しているような状態だ。とくにチンプンカンプンなのが英語を組むとき、欧文組版の場合だ。

まず、良し悪しの判断基準が自分のなかにほとんどないので、手探りで進んでいくより仕方がない。組版ルールの本を読めば、ある程度やっちゃいけないことはわかる。でも、たんなるルール通りの組版ではなく、ちゃんと美しい組版になっているかどうかは、正直

余韻多すぎ＆一瞬1行アキに見える。

字数が少なく余韻が多すぎ。

ちょい余韻が少ない。

余韻がまったくないため、段落の終わりが不明確。

ちょい上がって見える。

いって自信がない。

これは私だけではなくて、英語が苦手な日本人に共通する悩みではないだろうか。

グラフィック社から刊行されている『世界の美しい欧文活字見本帳』は、そんな悩みを解決するヒント満載の一冊になっている。これは、数十年にわたって嘉瑞工房がコレクションしてきた金属活字書体の見本帳やパンフレットのなかから、とくに優れたもの、重要なものを約三五〇点セレクトし、一つずつ解説とともに紹介したものだ。

古くは一七三四年に印刷されたカスロン商会の活字見本シートをはじめ、各国で制作された様々な時代の書体見本を収録しているのだが、やはり中心は、金属活字全盛の戦後から一九七〇年代にかけてのもの、とくに読み捨てられることの多いチラシやパンフ類、大判ポスターなどは、いまでは入手も難しい貴重なものばかりだ。

これらの見本は、活字メーカーが自社の書体の優秀さをアピールするために作ったものだから、「この書体はこう使えば効果的ですよ、こんな使い方もありなんですよ」といった具合に、各書体が最も活きる使用例がこれでもかとばかりに提示されている。

とはいえ、やはり私のような者は、図版を見ただけでは「きれいだなあ」で終わってしまう。良し悪しの判断までは難しい。そこで助かるのが、掲載図版それぞれに付された解説であ

段落最終行がノドをまたいでいる（ヨコ組の場合は4ザワ）。

行頭に拗促音。

二分のハンパがここにあるため、ベタ組が維持されていない。

ほぼ理想的な段落（0ザワ）

句読点の後ろや括弧の前後のアキがないので、読むときのリズムが狂う。

ポコッと空いて見える。

ページが１文字
だけで終わって
いる。

る。

もし５００ページ以上読んできた長編小説のラストがこん
な終わり方だったら……

読み物の「終わり方」（最終ページ）の例

偶数ページで終わる場合、
できれば１段落 or ３行以上ほしい

プロの組版者はどんなところを見ているのか、組版の良し悪しの違いはどんな部分に現れるのか、そんな疑問に答えてくれる本書は、自分のなかに基準を作るうえで、そのコツをつかむ取っ掛かりを与えてくれる貴重な本だ。とまあ色んなことを書いてきた。

美しい書体見本をただ眺めているだけでも、十分に楽しめる本だし、著者自身が「はじめに」で、解説にとらわれることなく、「あくまで、自分の感じたことを大切に」と書いているのだから。

奇数ページで終わる場合、
できれば３行以上アキがほしい

プロの組版者はどんなところを見ているのか、組版の良し悪しの違いはどんな部分に現れるのか、そんな疑問に答えてくれる本書は、自分のなかに基準を作るうえで、そのコツをつかむ取っ掛かりを与えてくれる貴重な本だ。とまあ色んなことを書いてきた。

美しい書体見本を眺めているだけでも十分に楽しめる本だし、著者自身が「はじめに」で、解説にとらわれることなく「あくまで、自分の感じたことを大切に」と書いているのだから。

パソコンとともにワープロソフトが普及し、だれもが自分で文字を組んで文章を発表できるようになった。文章に合ったフォントをえらび、強調したい部分には「太字」を使い、ちょっと窮屈だなと思ったら、行間をあけるなり改行するなり、色々と工夫をこらす。本書は、質の高い欧文組版で知られる活版印刷会社・嘉瑞工房が、数十年にわたってコレクションしてきた金属活字書体の見本帳やパンフレットのなかから、とくに優れたもの、重要なものを約三五〇点セレクトし、解説とともに紹介したものだ。

「読書体験の演出」の一例。感慨・余韻を感じられる終わり方。小説やエッセイなど、読み物系の最後は、「終わり」を意識しながら読み終えてもらいたい。ただし、短編や詩歌などは、どうしようもないことも多い。

過剰演出の例（吉行淳之介「薔薇販売人」の冒頭部分から）

曇った朝、勤め先の某商事会社へ行くつもりで、交叉路に立っていた檜井二郎は、にわかに気持が変った。

丁度来た逆方向のバスに乗り、いい加減のところで降りて、出鱈目の路をあちこち曲って歩いていると、不意に眺望が拓けた。眼下に石膏色の市街が拡がって、そのなかを昆虫の触角のようにポールを斜につき出して、古風な電車がのろのろ動いていた。

彼はぶらぶら歩いていった。標札の名前を読んだり、コンクリート塀の上にいちめんに植えられたガラスの破片を眺めたり、町内案内図に描かれた薄汚れた立札に眼を留めたりした。その案内板によると、彼の歩いている場所は、東京・小石川の高台にある某町であった。

彼はあちこち眺めて歩いていたが、思わず足を留めた。

道路からすこし引っこんだところにある、バラック建の小さな家の半ば開かれた窓の隙間から、午前の光がななめに流れ込んでいて、部屋の内部が鮮かに彼の眼に映った。見透せる範囲には、家具と名付けられるものは机ひとつない。だが彼の眼を惹いたものは、全く装飾のない鼠色の壁に、緋色の羽織があたりの空気を圧する華やかさで掛けられていたことだ。

モノトーンな情景描写の中に突如現れる〝緋色〟が鮮烈。
だからといって……

曇った朝、勤め先の某商事会社へ行くつもりで、交叉路に立っていた檜井二郎は、にわかに気持が変った。

丁度来た逆方向のバスに乗り、いい加減のところで降りて、出鱈目の路をあちこち曲って歩いていると、不意に眺望が拓けた。眼下に**石膏色**の市街が拡がって、そのなかを昆虫の触角のようにポールを斜につき出して、古風な電車がのろのろ動いていた。

彼はぶらぶら歩いていった。標札の名前を読んだり、**コンクリート塀**の上にいちめんに植えられたガラスの破片を眺めたり、町内案内図に描かれた**薄汚れた**立札に眼を留めたりした。その案内板によると、彼の歩いている場所は、東京・小石川の高台にある某町であった。

彼はあちこち眺めて歩いていたが、思わず足を留めた。

道路からすこし引っこんだところにある、**バラック建**の小さな家の半ば開かれた窓の隙間から、午前の光がななめに流れ込んでいて、部屋の内部が鮮かに彼の眼に映った。見透せる範囲には、家具と名付けられるものは机ひとつない。だが彼の眼を惹いたものは、全く装飾のない**鼠色の壁**に、**緋色の羽織**があたりの空気を圧する華やかさで掛けられていたことだ。

文章の密度、色合い、スピード感などの調節は、あくまで〝著者〟の仕事。下手に気を回すと過剰演出になる。それに、〝どう読むか〟は、〝読者の自由〟でもある。
（もちろん、学参のように必要性がある場合はこんなのもアリ）

『〔増補改訂版〕欧文組版』の文章（この資料用にちょっと変えてます）を InDesign のデフォルト設定（たぶんです……）で流し込んだもの

デフォルト（たぶん、強い禁則、追い込み優先、ぶら下がりなし、行末約物半角）で組んだもの
フォントはヒラギノ明朝 W3（横組用かな98%）＋ Aldus nova（106%、ベースライン＋2.3%）

やがて 15 世紀末には、アルダス・マヌティウス（Aldus Manutius）が、肉筆感覚を残しつつも印刷用書体としての機能を考慮した書体を創作します。これはオールドフェイス（old face）と呼ばれている書体です。1540 年にはフランスのクロード・ガラモン（Claude Garamond）が、オールドフェイスの決定版ともいえる書体を制作しました！　現在も世界のいろいろなフォントメーカーから発売されている Garamond という書体は、この人物の名前に由来しています。

ザワッとする部分に印をつけると

やがて 15 世紀末には、アルダス・マヌティウス（Aldus Manutius）が、肉筆感覚を残しつつも印刷用書体としての機能を考慮した書体を創作します。これはオールドフェイス（old face）と呼ばれている書体です。1540 年にはフランスのクロード・ガラモン（Claude Garamond）が、オールドフェイスの決定版ともいえる書体を制作しました！　現在も世界のいろいろなフォントメーカーから発売されている Garamond という書体は、この人物の名前に由来しています。

デフォルト（たぶん、強い禁則、追い込み優先、ぶら下がりなし、行末約物半角）で組んだもの
フォントはヒラギノ明朝 W3（横組用かな98%）＋ Aldus nova（106%、ベースライン＋2.3%）

やがて 15 世紀末には、アルダス・マヌティウス（Aldus Manutius）が、肉筆感覚を残しつつも印刷用書体としての機能を考慮した書体を創作します。これはオールドフェイス（old face）と呼ばれている書体です。1540 年にはフランスのクロード・ガラモン（Claude Garamond）が、オールドフェイスの決定版ともいえる書体を制作しました！　現在も世界のいろいろなフォントメーカーから発売されている Garamond という書体は、この人物の名前に由来しています。

『欧文組版』の設定で流し込んだもの（資料用に文字を大きくしたので、少しだけ設定をいじってます）
私の場合、横組では縦組ほどベタにはこだわらないので、下記のような感じに

やがて15世紀末には、アルダス・マヌティウス（Aldus Manutius）が、肉筆感覚を残しつつも印刷用書体としての機能を考慮した書体を創作します。これはオールドフェイス（old face）と呼ばれている書体です。1540年にはフランスのクロード・ガラモン（Claude Garamond）が、オールドフェイスの決定版ともいえる書体を制作しました！ 現在も世界のいろいろなフォントメーカーから発売されている Garamond という書体は、この人物の名前に由来しています。

→で自動でやっていること（手動調整は除く）

「文字組みアキ量設定」
半角数字やパーレンの前後などを少し詰める
行頭の半角数字を少し下げる

「正規表現」
数字と「年・月・日」などの字間をさらに詰める
1の前後などを少し詰める
！の後の全角スペースを二分幅（半角）に
仮名と！などの間を少し詰める

いろんな明朝体をプロポーショナルメトリクスで組んだ例

メトリクス（一番左はＭＳＰ明朝）

①三三三三名が、家へ帰った。
②三三三三名が、家へ帰った。
③三三三三三名が、家へ帰った。
④三三三三三名が、家へ帰った。
⑤三三三三三名が、家へ帰った。
⑥三三三三三名が、家へ帰った。
⑦三三三三三名が、家へ帰った。
⑧三三三三三名が、家へ帰った。
⑨三三三三三名が、家へ帰った。
⑩三三三三三名が、家へ帰った。

ベタ組（一番左はＭＳ明朝）

①三三三三名が、家へ帰った。
②三三三三名が、家へ帰った。
③三三三三名が、家へ帰った。
④三三三三名が、家へ帰った。
⑤三三三三名が、家へ帰った。
⑥三三三三名が、家へ帰った。
⑦三三三三名が、家へ帰った。
⑧三三三三名が、家へ帰った。
⑨三三三三名が、家へ帰った。
⑩三三三三名が、家へ帰った。

「一」や「へ」「っ」などを見るかぎり、プロポーショナルメトリクスで本文を組んでも大丈夫かな、と思えるのは⑨か⑦ぐらいかも。他はちょっとせわしない感じがする。ただ⑨⑦にしろ、ある程度行長がないと行ごとに字間がばらついてしまって気が散りそう。いっそラギッド組に？

あと、一行目の「（一番左は～」のあたりを見比べると、私はふだんから、無意識のうちに、目には見えない正方形の仮想ボディを感じながら文字を読んでいるんだな、ということがわかる。（とはいいながら、この段落冒頭の「、一」の字間、ちょっとツメちゃってますが）

ここはちょっと空けてます。

いろんな組版

い眺望とともに、当

字間がツメツメ。とくに本文7行目の「とともに、」あたりは、読んでいてそこだけ急にスピードアップしたように感じられて落ち着かない。

概要

財団法人サンリツ服部美術館は、諏訪市のサンリツ企画株式会社（現　株式会社サンリツ）が所有する美術品と、元セイコーインスツルメンツ・セイコーエプソン社長、故服部一郎氏が妻と娘に遺した美術品を散逸させることなく、広く公開することを目的として発足いたしました。諏訪湖畔に立つ建物は、建築家内井昭蔵氏の設計によるもので、「水辺より湧き上がる雲」をイメージしています。美しい眺望とともに、当館所蔵の美術作品をご鑑賞いただき、心のやすらぎの場となることを願ってやみません。

収蔵品内容

当館は、日本・東洋の古代から近代に至る絵画・書蹟・工芸に、西洋近現代絵画を加えた600点余を収蔵しています。

まず絵画は、佐竹本三十六歌仙絵断簡のうち「大中臣能宣像」（重要文化財）、弘安本北野天神縁起絵巻断簡「尊意参内図」（重要文化財）などの鎌倉時代の大和絵、あるいは、俵屋宗達にはじまる江戸時代の装飾性豊かな琳派の秀作、また、日観筆「葡萄図」（重要文化財）ほかの中国宋元画や室町水墨画などがあります。

書蹟は、光明皇后発願の一切経のひとつ「五月一日経」をはじめ、伝藤原行成筆「大字和漢朗詠集切」（重要美術品）および、伝藤原公任筆「堺色紙」（重要美術品）などの古筆切、また来朝して建長寺に入った南宋の禅僧兀庵普寧や、臨済宗大徳寺派の祖、宗峰妙超の墨蹟（ともに重要文化財）を含んでいます。

当館の主軸を成すのは、茶道具を中心とする工芸品です。本阿弥光悦が嫁にゆく娘に与えたと伝えられる「白楽茶碗 銘・不二山」（国宝）や、大名物「唐物茄子茶入 銘・紹鷗茄子」（重要美術品）のほ

収蔵品

※写真掲載の作品は常設展示はしておりませんが、順次展示替により出品いたします。

国宝
白楽茶碗（銘 不二山）
本阿弥光悦作
江戸時代

四季草花下絵新古今集和歌色紙帖
俵屋宗達下絵 本阿弥光悦書
江戸時代

美術館のリーフレット

「この僕が、そんな姑息な真似をすると思っているんですか「

「ええ、正直にいいますと「

「違う違う。ショートショートと箴言を組み合わせた、新しいタイプの創作を編み出したのですよ。だいたい、読者というのは、エッセイなんかでいくら大事なことが書かれていても、全然頭に入らない。作家の提案や意見なんかに耳を傾ける気はない。そうじゃなくて、小説の主人公に首ったけになりたいだけなんです。首ったけなんだから、それなら、いちいち小説の主人公に語らせれば良いわけですよ。それを多数繰り出すには、ショートショートが良い、ということになります「

「先生は、感情移入というものをご存じですか？「

「その言葉は知っていますが、その現象は信じない。感情が他者へ移って入っていくという現象はありえない。ただ、そう錯覚するだけのことです。わかったような気になるだけのことでしょう「

「はい、そういう屁理屈をもう何度も伺っております「

「おお、ずいぶん大人になりましたね、君「

「先生の場合、とにかく駄洒落が多すぎます。これはまず申し上げておかないといけません「

「誰じゃ？　そんなことを言うのは、なんちゃって「

「面白くないです「

「だ・じゃ・れの三音だから、順列組合せは六通りあります。だじゃれ、だれじゃ、じゃだれ、じゃれだ、れだじゃ、れじゃだ。このうち、言葉になっていないのは、最後のれじゃだ、だけなんですよ。凄いでしょう？「

「うーん、れだじゃ、は言葉ですか？「

「レダという人が名乗っているところです「

「だったら、レジャさんだって、名乗りたいですよう「

「レジャさんなんていないでしょう。もっと常識でものを考えなさい。まあ、このようになるのも、『じゃ『も』だ『も、どちらもが助動詞だからなんですね。駄洒落という単語自体が駄洒落の高いポテンシャルを秘めているというわけじゃ「

●

あ、これはまた、何ですか？　気持ち悪い。括弧の開きと閉じが逆です。

いや、さきほどまでと同じです。たまたま地の文がないと変に感じるだけです。この場合は、語らない地の文を括弧で括っているだけのことで、空集合という集合みた

カギ括弧の起こしと受けをわざと逆にしたもの。ふだん見馴れていないルールで組んであると気持ち悪く感じる。しばらく読んでいるとちょっと慣れてくるのも面白い。

森博嗣『実験的経験』
講談社文庫、2014（H26）

窟ゑは、最も甚たしき細民四十餘戸あるか、鼓處ゑは釜の焚き廻しと云ふことかある、何れも一家で是れを買ひ求め得られぬ者のみか、四十餘家共同して、一個の古釜を購求したのである、夫れ故各々同種の所有者であつて交代に使用するの約束と聞いた、假令は其の一個の釜を使用して、毎日順々に四十餘戸を戸毎に炊き廻はして、最後の家では、使用後直ぐに例の置屋へ曲げ込むのだ、スルと翌朝の使用者が是れを受けだして、使用後又た順々に廻はすのださうだ、其他は總て推して知るべしである。

以上の如く、述べ去り述べ來れば、斯の貧民窟なるものが、如何に風紀を紊亂し、如何に害毒を傳播するゑ至るかは、縱ぬ推測するゑ難からぬのである、尚ほ此の他に伏在する魔力も、蓋し思ひ半はに過ぐるものあらうと考へる、宜しく酌酌する所あつて、貧民救濟の方策を講ずると俱に、悪むべき風習を一掃されたいのである。

待合營業

女將の取持と魔物の御愉快

魔物の出入し狂を演ずべき唯一の場所、所謂魔窟である、之れ等營業の主人公なるものは、多くは女將で、海に千年山に千年とも云ふべき、寒乙色界にかけては殆んど多年の經歷を持つた年増が、御目出度筋より資本金を出させて、うして此の待合なる商賣をするのが、一般の樣ゑ見受けられるのである。

此の魔窟に出入すべき妖怪は、曰く藝妓、曰く娘義太夫、曰く高等淫賣、曰く良家の令嬢妻君などである、以上の婦人には必らず男、男には必らず婦人が目的となつて、此の待合を屈竟の戰場と定めてある、して此の家の女將は、來る客毎ゑ良き加減の待遇をする外に、一歩進んで二人の間に取り持をしてをるのだ、して見れば女將は、惡魔を紹介する一のパチルスと評して宜しい。

藝者義太夫語りの何れもは、ほんの形式に座敷に出たり若くは高坐に顯れて、後之

段落頭の字下げなし。見出しの字間やルビの位置（「魔物」など）の大胆さ（テキトーさ？）が魅力的。こんな例を見ると、何をやっても許されるような気がして勇気がわいてくる。

川上峨山『魔窟の東京』
國民評論社、1902（M35）の復刻版

分は、革匣の中には、書籍が入つて居るから、開けて出せ、さうした上で
いろ〳〵相談しやうといふ意味であらうと推察したので、直ぐ立寄
つて、蹤がんで、革匣の蓋を開けた所が、中には、襯衣だの衣服の古いの
などが、一杯入つて居るきりで、書籍らしいものは影さへ無い。何う
した事とも解ぬので、蓋を両手で押し上げたまゝで、ウード氏の顔を
凝乎と見あげて居ると、やがて、氏は傍へ来て、蓋に手を掛けて、元の通
りに蓋を爲やうとするので、漱石先生は、直ぐに元の通りに蓋を下し
た。と、ウード氏は、又、蓋に手を掛け、開けやうとするので、漱石先生も
一緒に蓋を持ちあげた。漱石先生には、何の事やら、一向に解らぬ。
さういふ同じ事を二三度繰り返した後で、漱石先生も堪らへ兼ねて
これは一體何ういふ譯なのかと、尋いた。ウード氏は、『錠前が毀はれ

て居る』と云ふ。漱石先生は、ます〳〵解せず、『錠前は成る程損じて居
るが、その錠前の損じて居ること、我輩との間に何等の關係があ
るのか』と、斯う哲學的に尋ねた。すると、ウード氏は、『でも、御前は錠前直
しだらう』と云つた。漱石先生、こゝに至つて、憤然と立ち上がつて『否』
と、答へた。所で、その『否』なるものが、如何にも激烈な調子で云ひ表
はされたものなので、漱石先生の、如何に錠前直しと呼ばれたのを憤
つて居るかゝ明に知り得られたから、ウード氏は、少時呆れて、漱石先
生の顔を見て居たが、やがて、『君はそれでは何ういふ人なのか』と尋い
た。『イヤ、自分は、文科大學の學生で、がう〳〵いふ用向きで來たのだ』
と、漱石先生が、説明するといふと、ウード氏大に慌てゝ、『ヤア、それは
飛んでも無い間違ひであつた。實は錠前直しを待ち受けて居た所

本文が四分アキで約物をそのアキ部分に入れているところに
時代を感じる。NHK方式の引用符“No”も見どころ？

馬場孤蝶『葉巻のけむり』
廣文堂書店、1917（T6）の復刻版

会話文が二重カギ括弧で括られている。
「七、眞　相」のアキに時代を感じる。

たのかと、私がハッとするのを杉田は抑へるやうに、
『なアに、猛獣襲撃のフイルムが一巻終つたのだよ。』
と、平氣でいつた。

七、眞　相

私は、その夜、ふけてから宿にかへつた。
杉田から聞かされたハイマーといふ外國人の名前が何だか聞いたことのある名だと、いつまでも頭を離れなかつたが、宿に歸つて、自分の室に一歩ふみ込んだ時、ふと思ひ出した。
『さうだ、昔つてマネージャーから聞いた金持ちの米國人の名だ、しかも自分の室を借りてゐて、先頃來、行方不明になつた男の名だ！』
斯う思ひ出すと、初めて其の行方不明の謎も解けたやうな氣がした。だが、何しろ相手は外國人だし、うつかりした事を喋舌つて飛んだ問題を惹起しては困ると考へたので、マネージャーなどには何にも云はなかつた。
然し、私の烈しい好奇心と、例の無聊とは、どうしてもハイマー事件を其のまゝにしておくことを許さなかつた。

私は其の翌日、杉田を麻布飯倉の家にたづねて、彼の倶樂部にまだゐるといふハイマー殺しの女を紹介してくれと云つた。
『僕も直接知つてゐるんぢやないから、紹介するわけには行かないな。』
杉田は、私が何か秘密をあばかうとでもするものと思つたらしく、俄かに警戒し出した。で、私は單獨で活動を始めるより外なかつた。
その日〳〵を退屈にさいなまれつゝ過ごしてゐる私にとつて、それは實にお誂ひ向きの仕事であつた。
私は、彼の會員であるのを幸ひ、三日にあげず例の家へ行つて、そこの主婦と懇意になることを努めた。そして間もなく、ハイマーを刺した女は、西垣いよ子といふ十八歳の美人であることを確かめた。
いよ子がハイマーを刺したのは、單に突嗟的反抗からの発行であつたか、それとも他にもつと複雜な魂膽が含まれてゐたのか、そこは更に精探した上でなくては明言出來かねると思つた。
そして引きつづき探索の歩を進めた。
其後、いよ子は湘南の某所に行つたと聞き、私はすぐ其の後を追うた。
年が押しつまつた。例年より早く襲つて來た寒氣にもう二度も淡雪が降つた。世間の景氣が

須藤鐘一『怪奇小説　女難懺悔』
白揚社、1926（T15）の復刻版

からはじまっている。つまり、前章で述べた〈鬼の足跡〉や〈衣冠の幻〉、生ける鬼としての盗賊の跳梁とともに天狗もまた興隆してきているのであり、その動きは時代を一にして育っている。そして中世にいたって、〈鬼〉の存在はひとつの哲学として昇華をとげることによって、観念の世界に定着してゆくが、天狗は逆に山伏を媒介としてしだいに具体的行動をもちはじめ、人間臭をつよめてゆく。

2　天狗と飛行空間

天狗の星　天狗が記録にあらわれるのは『日本書紀』の舒明天皇九年二月である。「丙辰の朔、戊寅に大きなる星東より西に流る。便ち音ありて雷に似たり。時の人曰く、『流星の音なり』といふ。亦は曰く『地の雷なり』といふ。是に僧旻僧が曰く『流星に非ず、是天狗なり。その吠ゆる声雷に似たらくのみ』といふ」とある。雷の音のする流星を自信にみちて「天狗」だといったのは、『漢書』の「天文志」に「天鼓有レ音、如レ雷非レ雷天狗。状如二大流星一」とあるのによったものらしい（『日本古典文学大系』の頭註による）。雷鳴の音をもっていたということは、古代中国の雷神観からすれば天狗とは天帝に近侍するものの一種と

考えられていたのかもしれない。「天鼓」が「天狐」と考えられ、「天狗」が「あまぎつね」とよまれるというすじみちから、狐の通力などが想像されるようになったのかもしれないが、その原型に「大流星」という不可解な非生物的現象があったことはたしかである。流星、彗星など、星の変化を怖れたのは、それが天帝の意志に属することと考えたからであるが、天狗もまたこうした星の一つであったのであろう。『太平記』の「相模入道弄田楽竝闘犬事」のなかで、北条高時が、田楽の姿をした天狗どもと宴に酔い興じてうたった歌は「天王寺ノヤ、ヨウレボシヲ見バヤ」という歌であった。「ヨウレボシ」は近年「天王寺」と結びつけて「弱法師舞」と解する説もあるが、「妖霊星」と解して不吉の前兆をうたった天狗歌とする説が従来とおっていた。古い時代の、流星を天狗とする説がずっと意識の底流にあったことをものがたるものである。そしてまた、天狗が宇宙空間とかかわり、飛行をその性能のひとつとせざるを得ない発想も、ここにひとつの根があるといえる。

天狗と神　もちろん、天狗の飛行の術の母胎となるものに神仙思想があり、脱俗の過程で

仙思想　自然に還り自然に遊ぶことが可能であるという修業が行なわれていたことも考えねばならない。女の膚の色に見惚れて墜落した久米の仙人はあまりに有名であるが、『本朝神仙伝』の伝えによれば、倭武が白鳥と化して昇天したのをはじめ、役行者小角も、武内宿禰も、都良香もいずれも終りは仙となっていず方へか去っていったのであるという。

イニシャル＆割り注風の小見出し。

馬場あき子『鬼の研究』
ちくま文庫、1988（S63）

牛乳を飲み終わった人から、紙パックを自分の番号のケースに戻して席に着くように。全員飲み終わったようですね。「終業式の日まで牛乳かよ」なんて声も聞こえましたけどミルクタイムも本日で終了です。お疲れさまでした。「来年はないのか？」ありません。本年度このS中学校は『厚生労働省・全国中高生乳製品促進運動』のモデル校に指定されていました。そのため、みんなに毎日、牛乳を二〇〇ミリリットルずつ飲んでもらっていたのです。四月の身体測定では、身長の伸び率も骨密度も、同年齢の全国平均を上回っているのではないでしょうか？　楽しみですね。「自分たちは実験台か？」確かに、お腹が少しゆるめだったり牛乳嫌いな子にとっては災難な年だったかもしれません。モデル校は教育委員会がランダムに選んだものですし、紙パックとケース両方にクラス名と出席番号まで記入してきちんと飲んでいるか確認されるのでは、実験台にされていると感じてもおかしくはないと思います。ただ、ついさっきまでおいしそうに飲んでいたのに、実験台と

リュウミン13級0.5歯詰め←かな？

ていました。そのため、みんなに毎日、牛乳を二〇〇ミリリットルずつ飲んでもらっていたのです。四月の身体測定では、身長の伸び率も骨密度も、同年齢の全国平均を上回って

冒頭部分。リュウミンを均等詰めで組んでいるみたいで、第一印象から窮屈な感じがしたもの。「二〇〇ミリリットル」の「〇〇」だけ平体っぽくなっているのが不思議。

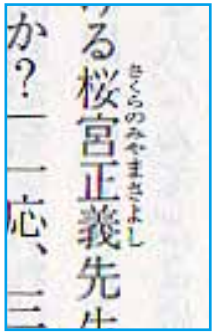
湊かなえ『告白』
双葉文庫、2010（H22）

化学の勉強に励みながら、塾の講師のアルバイトを始めました。食事もそこそこに夜遅くまで塾で勉強する子供たちを、かわいそうと言う大人もいますが、私にしてみれば、親に頭を下げられてまで進学させてもらえるなんてまったくいいご身分です。さて大学四回生、就職活動です。研究者の道も捨てがたいけれど、安定した生活を手に入れたいという気持ちの方が勝りました。おまけに育英会の奨学金は教員になると返済が免除されるというではありませんか。私は迷わず教員採用試験を受けました。「動機が不純？」そう思われても仕方ありませんね。でも、やるからには教育者としての仕事を全うしようと決意したのです。よく、やりたいことが見つからないと言い訳しながら、いい歳をして家でぐだぐだしている人がいますが、やりたいことがすぐに見つかり、それに従事できる人なんてごくわずかです。それなら、目の前にあることを精一杯こなしていけばいいのではないでしょうか。それは、やりたいことを見つけたときの自分にとって決してマイナスにはならないはずです。「どうして高校ではなく中学の先生になろうと思ったの？」同じ教育者になるなら義務教育の現場に挑戦したいと思ったからです。高校は辞めたくなれば辞めればいいのですから。逃げ場のない現場にいる子供たちに関わっていきたい、そんな志を持っていました。私にも熱い時代があったのです。

田中さん、小川くん、そこ、笑うところじゃないですから。

中学校の教員になって丸八年、最初は修業も兼ねてなのか都市部のM中学校で三年、一年休職して、今度は県境に近いのんびりムード漂うこのS中学校で四年、実質七年勤務したことになります。

「あのM中学校？」そうです。最近テレビでよく見かける桜宮正義（さくらのみやまさよし）先生のいる学校です。はい落ち着いて。そんなに有名人ですか。「知ってるのか？」一応、三年間同じ職場に勤務していたので、知っていることは知っていますが、あの頃は熱血先生といっても今ほどではなかったので、多分みんなの方が詳しいのではないでしょうか。何ですか？　前川さん。「知らないから説明してほしい？」では、あまり気乗りしませんが簡単に。桜宮先生は中学生の頃から不良グループのリーダーで、高校二年生のとき、担任教師への傷害行為で退学処分になりました。その後世界中を放浪しながら、そこでもかなり危険なことをしていたそうですが、紛争や貧困の中で生きる人たちと出会い、共に生活するにつれ、自分の過ちに気付き、帰国後、高校卒業資格を取り、有名私立大学に進学し、中学校の英語の教員になられました。中学校を選ばれたのは、自分が道を踏み外した年頃の子供たちに同じ過ちを繰り返してほしくない、と思われたからだそうです。数年前からは学校が終わった後も繁華街を夜回りし、家に帰らずあてもなくうろついている子供たち、自分の学校の生徒ではない子供たちにも一人一人声をかけ「自分を大切にしよう。やり直しはたった今



同じく『告白』から。左ページ4行目、親文字2字にルビが6文字。本全体から、「とにかくタイトルに」という意志が感じられる組版。

雨はまだ二三日はふりさうになかつた

「鶴の葬式」　丸山　薫

冬亭は岸に立つて、淡然と鶴をながめてゐたが、
「眠つてゐるんですね。起しでやりませう」
といふと、袂からマロニエの實をだして鶴に投げつけた。鶴は首をあげて、じろりとこちらへふりかへると、ちよつと羽づくろひをし、脚を踏みかへただけで、また動かなくなつてしまつた。冬亭は、こいつめといひながら、鶴を的にしてマロニエの實を投げてゐると、うしろで、
「お戯れなすつちや困ります」
といふ聲がした。
ふりかへつて見ると、髪も眉も雪のやうに白い、上背のある七十ばかりの老人が、ゆつたりとした著流しで、枸杞の繁みのそばに立つて、じつとこちらを見てゐた。夕闇の中で、足袋の白さがまはりを明るくするほど、あざやかに浮きあがつてゐた。

「西林園」より　久生十蘭

「みづからことの姓名は、父はもと京都の產にして、姓は安藤名は慶三あざなを五光。母は千代女と申せしが、三十三歳の折、或夜丹頂の夢をみてはらめるがゆゑに、たらちねの胎内を出でし時は鶴女と申せしが、成長の後これを改め清女と申し侍るなり」

落語「たらちね」より　作者不詳

夢の沖に鶴立ちまよふ　ことばとはいのちを思ひ出づるよすが

『閑雅空間』

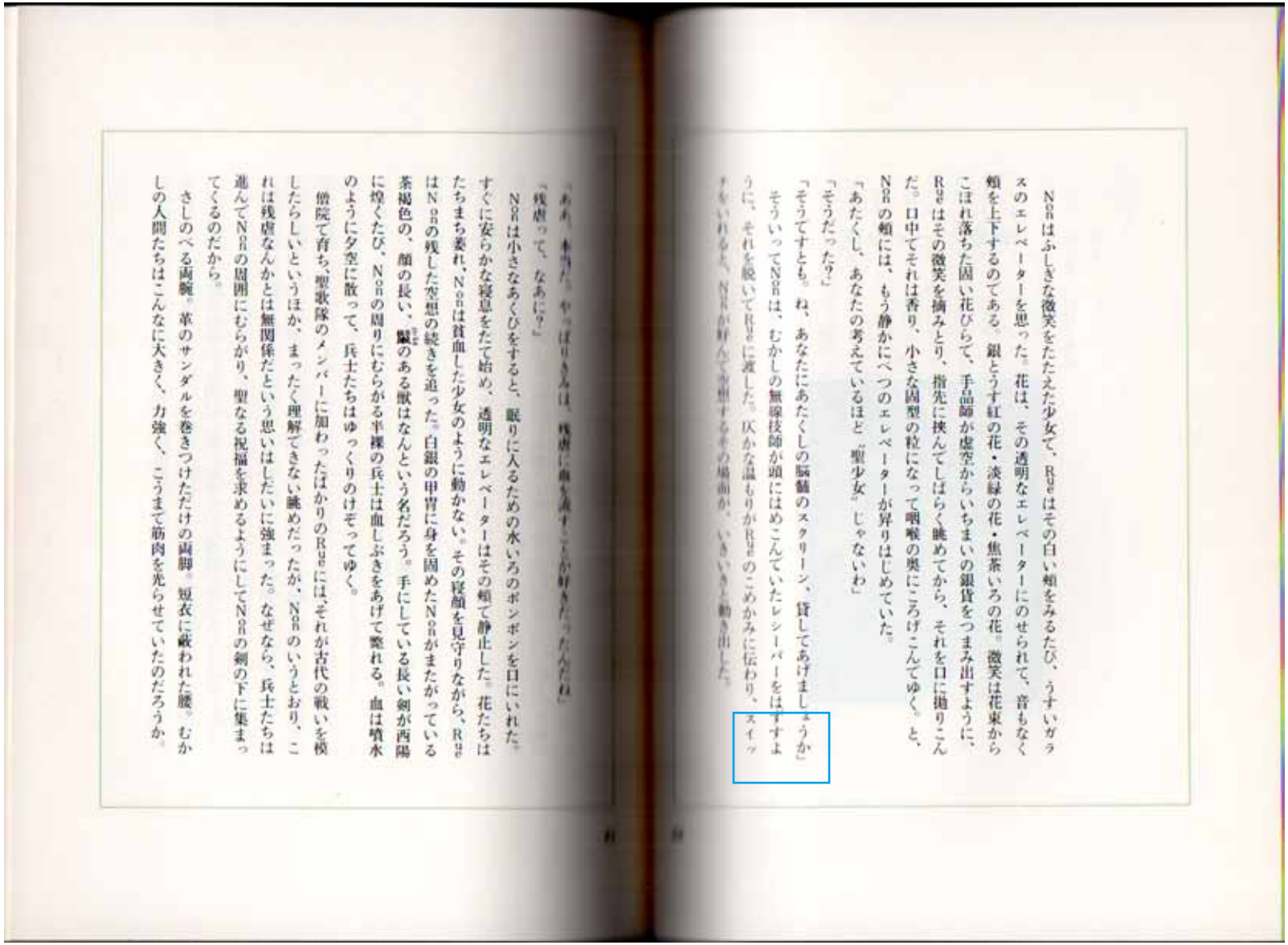
鶴

といへばヴァレリーが歌ふといかにも似合ひさうで、たとへばランボーの「鳥」、ボーの「大鴉」、あるいはボードレールは『悪の華』の「梟」と比肩する秀作があつてもよからうに、私は寡聞にして知らぬ。鶴は東洋、寒帯・亞寒帯・温帯の支那や日本で、殊に好まれる涉禽なのだらうか。もつとも、頭上に凝血色の飾りを持つ「丹頂」は日本の特產で、あれの紋如は美觀の上からも大いにマイナスになる。西歐ではさしてもて囃されぬ所以かも知れない。かく言ふ私自身、實はその丹頂にしても眞鶴、鍋鶴にしても、動物園でちらりとお目にかかつた記憶のみ、鶴の飛來で有名な周防八代、羅漢の阿久根へも見に行つたことがない。どうやら私は生來、禽園でも雉孔雀と對峙してゐる方が愉しい氣質らしい。時時、丹頂の檻の方に目を遊ばせながら。

こちらは打って変わって、ほどよいアキの精興社明朝による組版（活版）。各章冒頭の引用文から塚本氏自身の文章に入る部分で、アクセントとしてイニシャル組みが使われている。

塚本邦雄『詩趣酣酣』
北澤圖書出版、1993（H5）

ちょっと変わった「ぶら下げ」



Nananはふしぎな微笑をたたえた少女で、Rugeはその白い頬をみるたび、うすいガラスのエレベーターを思った。花は、その透明なエレベーターにのせられて、音もなく頬を上下するのである。銀とうす紅の花・淡緑の花・焦茶いろの花。微笑は花束からこぼれ落ちた固い花びらで、手品師が虚空からいちまいの銀貨をつまみ出すように、Rugeはその微笑を摘みとり、指先に挟んでしばらく眺めてから、それを口に抛りこんだ。口中でそれは香り、小さな固型の粒になって咽喉の奥にころげこんでゆく。と、Nananの頬には、もう静かにべつのエレベーターが昇りはじめていた。

「あたくし、あなたの考えているほど"聖少女"じゃないわ」

「そうだった?」

「そうですとも。ね、あなたにあたくしの脳髄のスタリーン、貸してあげましょうか」

そういってNananは、むかしの無線技師が頭にはめこんでいたレシーバーをはずすように、それを脱いでRugeに渡した。仄かな温もりがRugeのこめかみに伝わり、スイッチをいれると、Nananが好んで空想するその場面が、いきいきと動き出した。

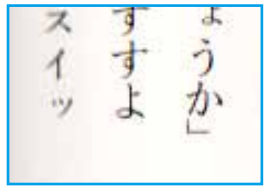
「ああ、本当だ。やっぱりきみは、残虐に血を流すことが好きだったんだね」

「残虐って、なあに?」

Nananは小さなあくびをすると、眠りに入るための水いろのポンポンを口にいれた。すぐに安らかな寝息をたて始め、透明なエレベーターはその頬で静止した。花たちはたちまち萎れ、Nananは貧血した少女のように動かない。その寝顔を見守りながら、RugeはNananの残した空想の続きを追った。白銀の甲冑に身を固めたNananがまたがっている茶褐色の、顔の長い、鬣のある獣はなんという名だろう。手にしている長い剣が西陽に煌くたび、Nananの周りにむらがる半裸の兵士は血しぶきをあげて斃れる。血は噴水のように夕空に散って、兵士たちはゆっくりのけぞってゆく。

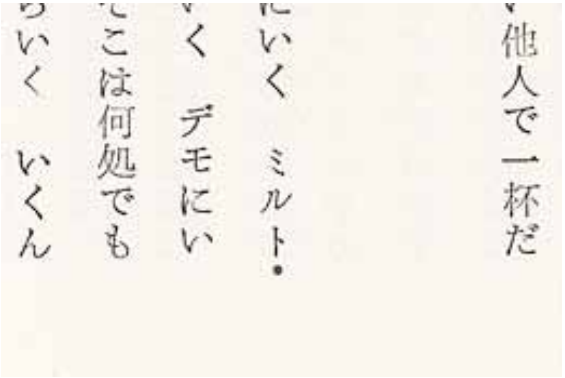
僧院で育ち、聖歌隊のメンバーに加わったばかりのRugeには、それが古代の戦いを模したらしいというほか、まったく理解できない眺めだったが、Nananのいうとおり、これは残虐なんかとは無関係だという思いはしだいに強まった。なぜなら、兵士たちは進んでNananの周囲にむらがり、聖なる祝福を求めるようにしてNananの剣の下に集まってくるのだから。

さしのべる両腕。革のサンダルを巻きつけただけの両脚。短衣に蔽われた腰。むかしの人間たちはこんなに大きく、力強く、こうまで筋肉を光らせていたのだろうか。

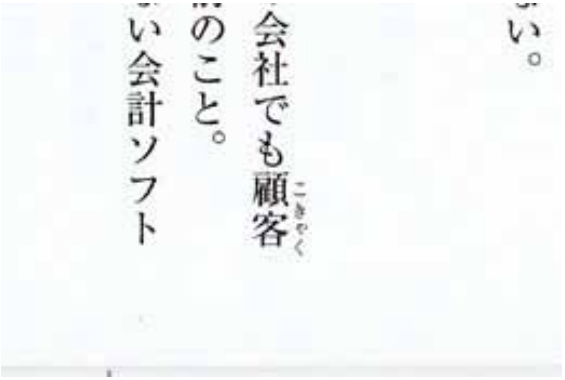


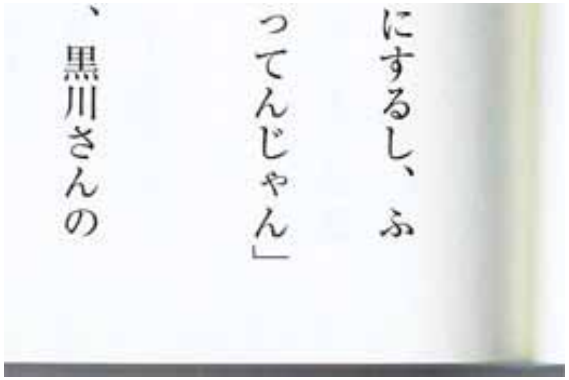
特色の罫とノド側のノンブルがいい感じ。ただ、欧文の小文字の位置がなんかヘン？　あと、カギ括弧のぶら下がりも珍しい。

中井英夫『とらんぷ譚』
平凡社、1980（S55）



『谷川俊太郎詩集』
思潮社、1965（S40）





音理雄『お仕事ください！』
学習研究社、2008（H20）

句読点以外がぶら下がっているのは、やっぱ違和感が……

ハウスルールを楽しむ

になっていろいろのことがあったころには、ジムがどれほど独立心の強い人か知りませんでした。ジムが自立できるようになるまであたしの父の援助を受けるのがなぜわるいのか――あたしにはどうしてもわかりませんでしたわ。あたしたちはそのことで、何時間もいい争いました。ジムは、あたしに彼の会計係の給料で生活してくれといって承知しないんです」

「その喧嘩のことならあたしも覚えてるわ」とパットがつぶやいた。「でもまさかあれがそんなに――」

「あたしだってそんなに大事なこととは思っていなかったのよ。お父さんが隣りに小さな家を建てて家具を入れて、結婚の贈物にしてくださるということを、お母さんから聞いたとき、あたしは内証にしておいて、ジムをびっくりさせるつもりだったの。だから結婚式の前の日まで、あたしは彼になにもいわずにいたの。ところがあの人はひどく腹を立てたのよ」

「なるほど」

「彼は、町の反対側に、月に五十ドルの家賃で小さな家を借りてあるというの――その程度の家賃が精一杯のところで、あたしたちは彼の収入で生活していくことを覚えなくちゃいけない、と彼はいうの」ノーラはため息をついた。「あたしもついかんしゃくを起こしてしまったのよ。それでとうとう……喧嘩になってしまったの。ひどい喧嘩だったわ、そしてジムがどこかへ行ってしまったの。それだけよ」彼女は目をあげた。「ほんとうにそれだけなのよ。あたしはいままで、お父さんにもお母さんにも、だれにもその話はしなかったわ。そんなことのために、ジムに逃げられてしまうなんて――」

「ジムは一度も手紙をよこさないんですか?」

「一度もよ。それで、あたしは……死のうかと思ったわ、町中の人が噂をするし……そこへジム

がひょっこりもどってきて、二人で話し合ってお互いになんて愚かだったんだろうと思ったの。そしていまのようになったわけよ」

なるほど、最初から問題の種はこの家だったのか、とエラリイは思った。おかしなことだ！この事件では、どっちを向いても、必ずそこにこの家のことがでてくる。災厄の家か……エラリイは、この言葉を発明した新聞記者は、千里眼みたいなやつだ、と思った。「それで、あなたがたが結婚してからいつもやっていた喧嘩というのはなんですか?」

ノーラは身を縮めた。「お金よ。彼はお金をせびりはじめたの。そして、あたしのカメオやなんかを……でもそれはほんの一時だけだったわ」と彼女は急いでいって、「あの人はね、十六号道路の酒場で賭博をはじめたのよ――男の人って、たいてい一度はああなるのだと思うわ――」

「ノーラ、あんたローズマリー・ハイトのことで、なにか知っていはしませんか?」

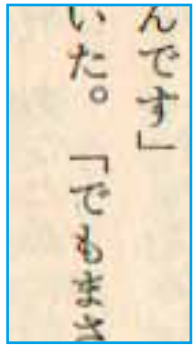
「なんにも知らないわ。あの女は死んだんですってね。こんなことをいっちゃわるいけど……あたしはあの女は好きじゃなかったわ。ちっともよ」

「アーメン」とパティーがまじめな顔でいった。

「まあそうでしょうな」とエラリイはつぶやいた。「だがね、ぼくがいうのは――あんたは彼女について、なにか……あの手紙やジムの行動や、すべてのことと結びつくようなことを、なにか知ってやしませんか?」

ノーラはぎごちなくいった。「ジムはあの女のことをあたしに話してくれないんです。でもあたしは自分ではちゃんと感じていましたわ。エラリイさん、あの女はわるい女です。あんな女がなぜジムの妹なのかふしぎですわ」

「とにかく、彼女は妹だったんだ」とエラリイはポツリといって、「あんたは疲れているんだか



句読点の次にカギ括弧がきたときのアキが特徴的。二分アキが一般的だと思うが、全角アキになっている。

エラリイ・クイーン『災厄の町』
ハヤカワ・ミステリ文庫、1985（S60）

「それは、息子というのは、親父に、特殊な感情を抱きがちですからね」矢代の口調は、なだめるような調子になった。「父親を偶像視し、尊敬したい。それが裏切られたとき、幻滅は、憎悪に一転する。それを通りすぎると、ああ、親父も、おれと変わりない、ふつうの人間なんだな、と、父親の弱点を許し、かえって、親近感を抱くようになる。ぼくも、そんな経験がありますよ。男の子の、一種の通過儀礼といえますね」

「彼は、偽善者です。牧師という職業柄、人前では、立派なことばかり言い、他人を指導し、責め、弾劾し、そのくせ、てめえは、陰険で、小心翼々としていて……まあ、そんなことは、誰にでもありがちなことです。ぼくだって、そのくらいはわかっています。人間なんて、弱いものだ。どこからどこまで完全な人間なんて、いやしない。それはいいんです。だが……」

由木は、手酌で、ぐいぐい、強い液体をのどに流しこんでいた。矢代は、酔うと眠くなるたちなので、用心して度を越さないようにしていた。八分目ほど減ったブランデーの大半は、由木の胃に流れこんでいたのだった。

「矢代さん、あなたは」由木の目が、少しすわってきた。

「父親に殺されかけたことがありますか」

「え？」

「ぼくはそうでした。この傷は、一生消えるもんじゃありません。父はぼくを、見殺しに……」

けたたましい電話のベルに、由木の言葉はさえぎられた。由木は舌打ちして、乱暴に受話器をとった。

「ああ、おまえか」腹立たしさを押し殺したような声で、由木は、「連絡を待っていたんだ。いま、どこにいる？　……え？　そう結論をいそぐことはないだろう」由木は、いくらか、せきこんだ。

「待てよ。よく、話しあおう。はっきり決めるのは、それからだって……。おい、それは、あまり勝手すぎないか。……よし、これから行く」受話器を叩きつけるように置き、「すみません」あわただしく、由木は矢代に頭をさげた。「芝居の仲間が……前から止めるとか止めないとか、もめていたんですが、テレビでちょい役がつきそうになったもんで、足を洗うなんて言いだしやがって。あいつに抜けられると……。こっちも、やっと新しい芝居の準備がととのって、これから一発ってときなんですから。いや、あんな奴がいなくたって……。とにかく、ちょっと出なくてはならなくなっちまいました。すみません。また、近いうち」

由木は、壁にかかっていた短コートをかかえ、靴をつっかけて、とび出すように部屋を出た。

「きみ、鍵！　鍵！」矢代がどなるのに、廊下を大またに歩き出しながら、「いいです」由木はふりむいて、どなり返した。「開けっ放しで出てください。盗られるものなんて、ありゃしない」

そのとたんに、由木は、前を行く人間に突き当たった。初老の労務者風の男であった。

うのは、親父に、
なった。「父親を
。それを通りすぎ

句読点とカギ括弧がやはり全角アキになっている。おそらく早川書房のハウスルール。『紙つなげ！ 彼らが本の紙を造っている』もそうだった。これを見ると、「いまハヤカワの本を読んでいるのだ！」という気がする。

皆川博子『トマト・ゲーム』
ハヤカワ文庫、2015（H27）

一同は三人とも（医者も二人に加わっていた）反射的に、紫色にたそがれた木立のあいだに見えるうす暗い草地の斜面に眼を向けた。そこは、先ほどまで、あの褐色の肌の男が、からだをゆすりながら奇妙な祈りを捧げていた場所なのだ。が、インド人の姿は消えていた。

「あの野郎」と医者が憤然として足を踏み鳴らしながら言った。「これでわかった——犯人はあの黒ん坊なんだ」

「あなたは魔術を信じていなかったはずだが」穏やかにブラウン神父が言った。

「自分でもそのつもりでした」と医者は、眼をまんまるくして言った。「ただ、あの黄色い肌の怪物が、いかさま魔術師なんだと思うにつけ、胸がむかついていたことだけはたしかです。それがほんものの魔術師だったということになれば、なおのことやつがいやになるでしょう」

「といっても、やつがずらかったことは、なんでもない」とフランボウが言った。「やつを相手どって証拠をあげることも、どんな手を打つこともできやしないんだから。まさか、この管区のお巡りさんの所へ行って、魔法か自己暗示に依る自殺が行われましたと告げるわけにはいくまいし」

そのあいだにブラウン神父は家のなかに入り、死んだ男の妻に棒事を知らせに行った。

ふたたび外にあらわれたときの神父の顔は、やや蒼ざめ、悲痛味を帯びていた。しかし、その神父と妻との対面ちゅうに、どんな話が交わされたか、それは、すべてが明るみに出てからでも、ついに不明のままであった。

フランボウは、物静かに医者と話をしていたのであるが、友人がもどって来たのがあまり早いので、驚いた。が、ブラウンはそんなことを気にもとめず、すこし離れた所へ医者を引っぱって行った。

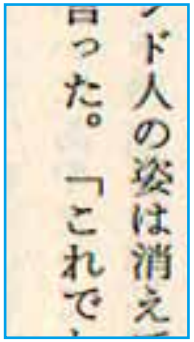
「警察を呼びにやったでしょうな？」神父は訊いた。

「ええ」とハリスが答える。「十分以内にくるでしょう」

「お願いがあるんだが」と、穏やかに神父が言う。「実は、わたしはこういう風変りな話を蒐める趣味がありましてな。ただ、こういう話には、いまのヒンズー人の場合もそうですが、警察の報告書には載せられないような要素が含まれていることがよくある。そこでお願いというのは、わたし個人のためにこの事件の報告書をひとつ書いていただきたいのです。あなたの商売は、頭がよくないと、できない商売ですからね」と神父は、容易ならぬ眼つきで医者の顔をまともに見据えながら言った。「あなたは、それは口にしないほうがいいと思っているらしいが、この事件のくわしい事情をある程度ご存じのようだと、わたしには思えるんですよ。わたしの商売も、あなたのと同様、相手の秘密を守る商売ですから、あなたがわたしのために書いてくださるものは、なんであれ、絶対秘密にしておきましょう。だが、洩らさず全部書いていただきたいものですな」

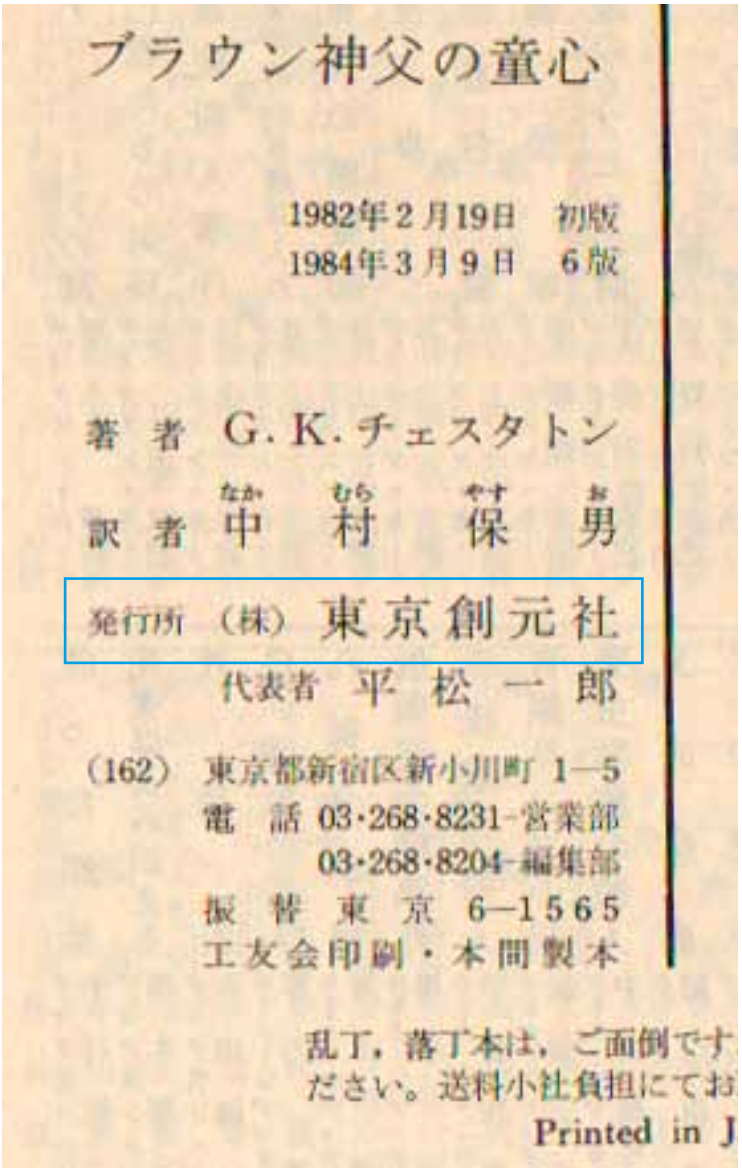
医者は、いくぶん頭をかしげて思案ありげに聴きいっていたが、一瞬、神父の顔をまともに見てから、「承知しました」と言って、書斎に入り、うしろ手に扉を締めた。

「フランボウ」とブラウン神父——「あそこのベランダの下に長い腰掛けがある、あそこなら、雨にも濡れずに一服ふかせるだろう。おまえは、わたしにとってこの世でただ一人の友達だから、話がしたいのさ。というよりも、いっしょに無言でいたいのかもしれん」



これも同じ組み方。
「ハヤカワだ！」と思いきや、

「句読点とカギ括弧の全角アキ」は早川書房のハウスルールではなく、じつは**本格ミステリルール**だったのだ！（冗談です。最近の創元文庫は二分アキ）。ハヤカワミステリマニアは、二分アキだと窮屈に感じるのかも。



ブラウン神父の童心

1982年2月19日　初版
1984年3月9日　6版

著者　G.K.チェスタトン
訳者　中村保男（なかむら やすお）

発行所　（株）東京創元社
代表者　平松一郎

（162）東京都新宿区新小川町 1—5
電話 03・268・8231—営業部
03・268・8204—編集部
振替東京 6—1565
工友会印刷・本間製本

乱丁，落丁本は，ご面倒ですが
ださい。送料小社負担にてお
Printed in J

創元推理文庫でした。

『人間失格』2種

間のからだに駄馬の首でもくっつけたなら、こんな感じのものになるであろうか、とにかく、どこという事なく、見る者をして、ぞっとさせ、いやな気持にさせるのだ。私はこれまで、こんな不思議な男の顔を見た事が、やはり、いちども無かった。

第一の手記

恥の多い生涯を送って来ました。

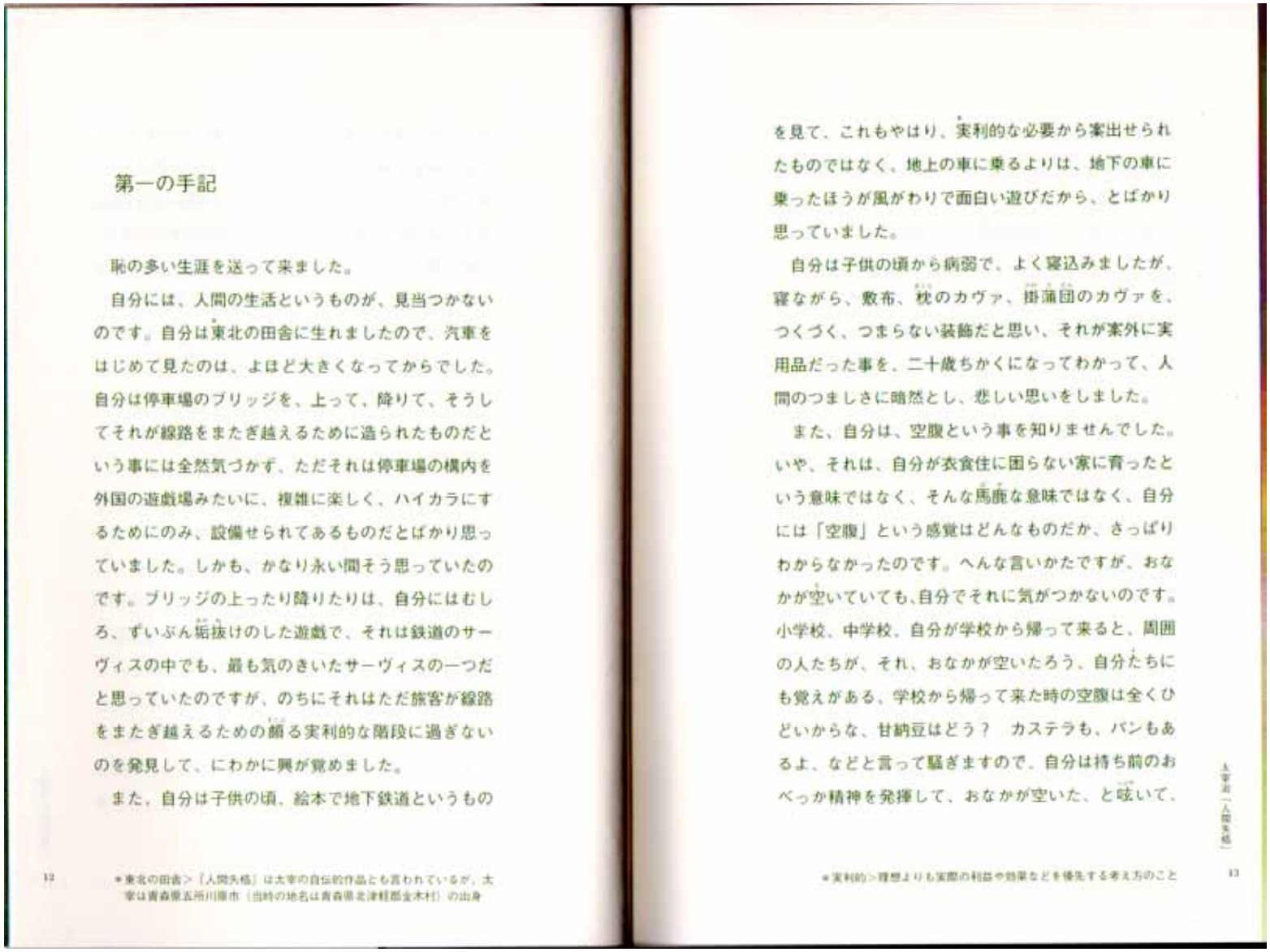
自分には、人間の生活というものが、見当つかないのです。自分は東北の田舎に生れましたので、汽車をはじめて見たのは、よほど大きくなってからでした。自分は停車場のブリッジを、上って、降りて、そうしてそれが線路をまたぎ越えるために造られたものだという事には全然気づかず、ただそれは停車場の構内を外国の遊戯場みたいに、複雑に楽しく、ハイカラにするためにのみ、設備せられてあるものだとばかり思っていました。しかも、かなり永い間そう思っていたのです。ブリッジの上ったり降りたりは、自分にはむしろ、ずいぶん垢抜けのした遊戯で、それは鉄道のサーヴィスの中でも、最も気のきいたサーヴィスの一つだと思っていたのですが、のちにそれはただ旅客が線路をまたぎ越えるための頗る実利的な階段に過ぎないのを発見して、にわかに興が覚めました。

また、自分は子供の頃、絵本で地下鉄道というものを見て、これもやはり、実利的な必要から案出せられたものではなく、地上の車に乗るよりは、地下の車に乗ったほうが風がわりで面白い遊びだから、とばかり思っていました。

おそらくこれまで最も多くの人に読まれてきた新潮文庫版の『人間失格』。どこから見てもスタンダードな組版。なんだかホッとする。

太宰治『人間失格』
新潮文庫、1986（S61）

横組みゴシック＋特色にびっくりして思わず購入。
帯文には〝ヨコガキ×人間失格「この夏。きっとダザイに恋をする」cover 南沢奈央〟とある。



第一の手記

恥の多い生涯を送って来ました。

自分には、人間の生活というものが、見当つかないのです。自分は*東北の田舎に生れましたので、汽車をはじめて見たのは、よほど大きくなってからでした。自分は停車場のブリッジを、上って、降りて、そうしてそれが線路をまたぎ越えるために造られたものだという事には全然気づかず、ただそれは停車場の構内を外国の遊戯場みたいに、複雑に楽しく、ハイカラにするためにのみ、設備せられてあるものだとばかり思っていました。しかも、かなり永い間そう思っていたのです。ブリッジの上ったり降りたりは、自分にはむしろ、ずいぶん垢抜けのした遊戯で、それは鉄道のサーヴィスの中でも、最も気のきいたサーヴィスの一つだと思っていたのですが、のちにそれはただ旅客が線路をまたぎ越えるための顔る実利的な階段に過ぎないのを発見して、にわかに興が覚めました。

また、自分は子供の頃、絵本で地下鉄道というものを見て、これもやはり、実利的な必要から案出せられたものではなく、地上の車に乗るよりは、地下の車に乗ったほうが風がわりで面白い遊びだから、とばかり思っていました。

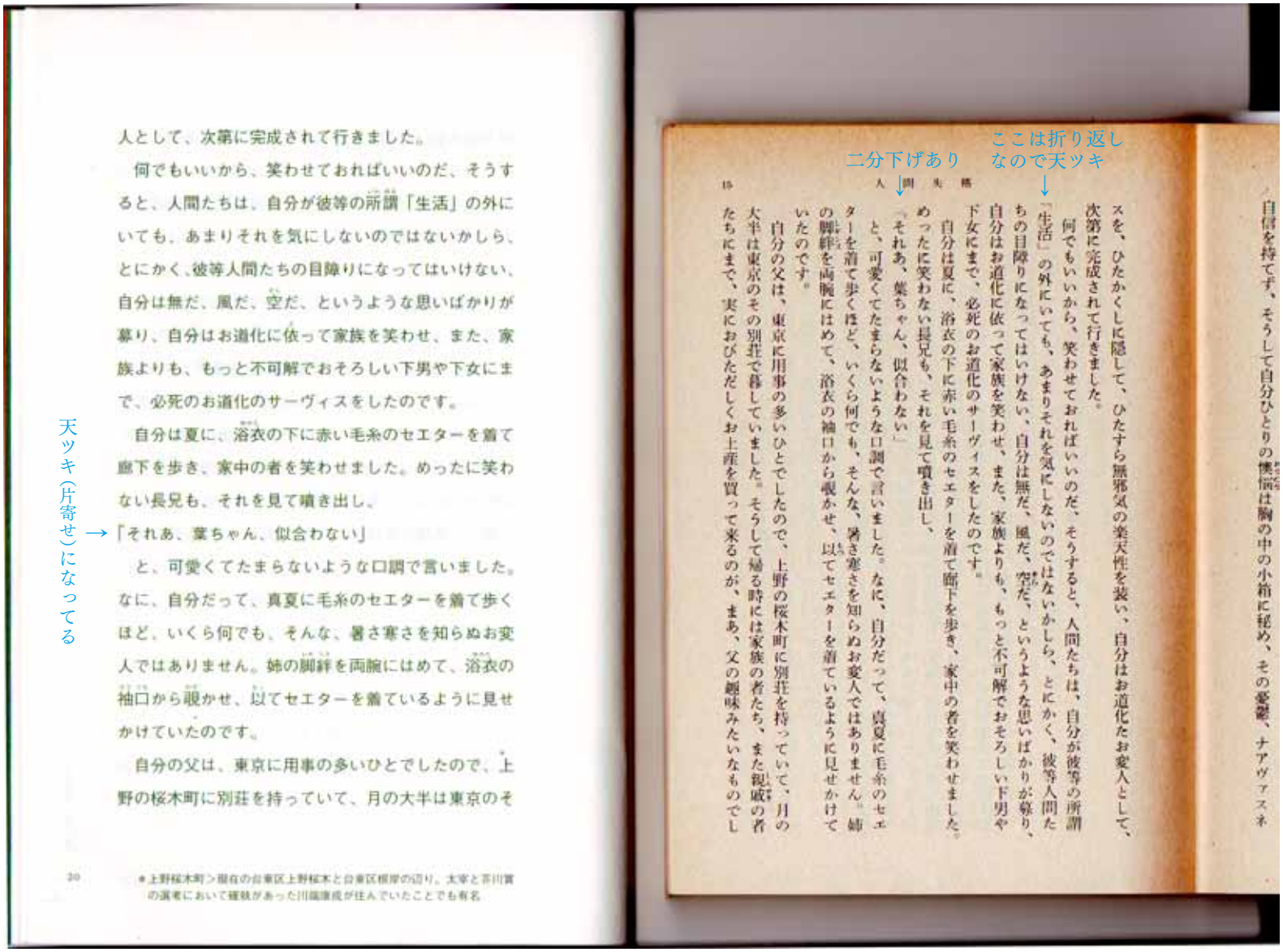
自分は子供の頃から病弱で、よく寝込みましたが、寝ながら、敷布、枕のカヴァ、掛蒲団のカヴァを、つくづく、つまらない装飾だと思い、それが案外に実用品だった事を、二十歳ちかくになってわかって、人間のつましさに暗然とし、悲しい思いをしました。

また、自分は、空腹という事を知りませんでした。いや、それは、自分が衣食住に困らない家に育ったという意味ではなく、そんな馬鹿な意味ではなく、自分には「空腹」という感覚はどんなものだか、さっぱりわからなかったのです。へんな言いかたですが、おなかが空いていても、自分でそれに気がつかないのです。小学校、中学校、自分が学校から帰って来ると、周囲の人たちが、それ、おなかが空いたろう、自分たちにも覚えがある、学校から帰って来た時の空腹は全くひどいからな、甘納豆はどう？　カステラも、パンもあるよ、などと言って騒ぎますので、自分は持ち前のおべっか精神を発揮して、おなかが空いた、と呟いて、

*東北の田舎＞『人間失格』は太宰の自伝的作品とも言われているが、太宰は青森県五所川原市（当時の地名は青森県北津軽郡金木村）の出身

*実利的＞理想よりも実際の利益や効果などを優先する考え方のこと

太宰治『ケータイ名作文学　人間失格』
ゴマブックス、2008（H20）



人として、次第に完成されて行きました。

何でもいいから、笑わせておればいいのだ、そうすると、人間たちは、自分が彼等の所謂「生活」の外にいても、あまりそれを気にしないのではないかしら、とにかく、彼等人間たちの目障りになってはいけない、自分は無だ、風だ、空だ、というような思いばかりが募り、自分はお道化に依って家族を笑わせ、また、家族よりも、もっと不可解でおそろしい下男や下女にまで、必死のお道化のサーヴィスをしたのです。

自分は夏に、浴衣の下に赤い毛糸のセエターを着て廊下を歩き、家中の者を笑わせました。めったに笑わない長兄も、それを見て噴き出し、

「それあ、葉ちゃん、似合わない」

と、可愛くてたまらないような口調で言いました。なに、自分だって、真夏に毛糸のセエターを着て歩くほど、いくら何でも、そんな、暑さ寒さを知らぬお変人ではありません。姉の脚絆を両腕にはめて、浴衣の袖口から覗かせ、以てセエターを着ているように見せかけていたのです。

自分の父は、東京に用事の多いひとでしたので、上野の桜木町に別荘を持っていて、月の大半は東京のそ

＊上野桜木町＞現在の台東区上野桜木と台東区根岸の辺り。太宰と芥川賞の選考において確執があった川端康成が住んでいたことでも有名

20

自信を持てず、そうして自分ひとりの懊悩は胸の中の小箱に秘め、その憂鬱、ナアヴァスネスを、ひたかくしに隠して、ひたすら無邪気の楽天性を装い、自分はお道化たお変人として、次第に完成されて行きました。

何でもいいから、笑わせておればいいのだ、そうすると、人間たちは、自分が彼等の所謂「生活」の外にいても、あまりそれを気にしないのではないかしら、とにかく、彼等人間たちの目障りになってはいけない、自分は無だ、風だ、空だ、というような思いばかりが募り、自分はお道化に依って家族を笑わせ、また、家族よりも、もっと不可解でおそろしい下男や下女にまで、必死のお道化のサーヴィスをしたのです。

自分は夏に、浴衣の下に赤い毛糸のセエターを着て廊下を歩き、家中の者を笑わせました。めったに笑わない長兄も、それを見て噴き出し、

「それあ、葉ちゃん、似合わない」

と、可愛くてたまらないような口調で言いました。なに、自分だって、真夏に毛糸のセエターを着て歩くほど、いくら何でも、そんな、暑さ寒さを知らぬお変人ではありません。姉の脚絆を両腕にはめて、浴衣の袖口から覗かせ、以てセエターを着ているように見せかけていたのです。

自分の父は、東京に用事の多いひとでしたので、上野の桜木町に別荘を持っていて、月の大半は東京のそたちにまで、実におびただしくお土産を買って来るのが、まあ、父の趣味みたいなものでし

19　人間失格

ここは折り返しなので天ツキ

二分下げあり

天ツキ（片寄せ）になってる

「それあ、葉ちゃん、似合わない」の部分、右ではちゃんと二分下げになっているが、左では字下げなしになっている。これだと、前行行末まで文章がきていた場合、改行なのか折り返しなのかわからない。青空文庫なんかのテキストをそのまま流し込むときは、行頭のカギ括弧には注意が必要かも。

『人間失格』の字下げの違い

“人間失格” の烙印を押された
た（ように見える）女優さん……

終わり